

いもせやまおんなていきん

妹背山婦女庭訓

〔解説〕

明和八年（一七七一）大坂竹本座初演。近松半二らの合作で、全五段の時代物。当時衰退していた竹本座がこの作品の大当たりにより盛り返したと言われるほど、人気のあった作品です。物語は藤原鎌足親子による蘇我入鹿討伐を題材に、大和地方の伝説や謡曲、幸若舞曲などを取り入れ複雑な構成の大作となっています。

天智天皇の御代、蘇我入鹿は天皇派の藤原鎌足を失脚させ、自ら帝位につきます。入鹿は母が白い牝鹿の生血を飲んで生まれた為、超人的な能力を持っていましたが、爪黒の鹿の血と嫉妬に狂った女の血を混ぜ鹿笛に注いで吹くと、その力が失われるという宿命でもあり、ついにはその弱点を突かれて討伐されるのです。

〔あらすじ〕

〈杉酒屋の段〉鎌足の子淡海（たんかい）は烏帽子折の求馬（もとめ）に姿を変え、三輪の杉酒屋の隣に住んでいました。杉酒屋の娘お三輪は求馬に想いを寄せますが、求馬のもとに恋人橘姫が尋ねて来ます。お三輪はそのことを丁稚の子太郎から聞いて、求馬の不実を責めますが、求馬はうまく言い逃れをします。お三輪は二人の仲を誓うため、七夕に祀ってあった紅白の苧環（おだまき）の、赤い方を求馬に渡します。そこへ橘姫がやってきて、お三輪

と橘姫が求馬を取り合い、さらにお三輪の母が帰ってきて、求馬（淡海）を捕まえようと騒ぎになります。

《道行恋芋環》夜の布留（ふる）の社で、求馬を巡って橘姫とお三輪の争いが繰り広げられます。夜明けの鐘の音に驚いて逃げ帰る橘姫の袖に、求馬が持っていた芋環の赤い糸を付け、その求馬の裾にお三輪が白い糸を付け、糸をたぐりながら後を追っていくのでした。

《姫戻りの段》求馬は三笠山の御殿までたどり着き、橘姫が入鹿の妹であることを知ります。求馬は橘姫に、夫婦になる条件として、かつて入鹿が盗んだ神器、十握の剣を奪うことを誓わせます。）

《金殿の段》求馬を追ってきたお三輪は、入鹿の御殿に入り込みます。求馬と橘姫の婚礼が行われると聞き嫉妬に駆られたお三輪は、女中たちにもいたぶられ益々逆上します。そのお三輪を漁師鱈七（ふかしち）に姿を変えて御殿に入り込んでいた鎌足家臣金輪五郎が刺し、入鹿を討つには嫉妬に狂った女の血が必要であり、お三輪のその血が愛しい求馬の役に立つことを言い聞かせます。お三輪は来世で求馬と添うことを願いながら息絶えるのでした。

杉酒屋の段

てこそ出でて行く。日とともに営むさまも入相の、
四方の市座戸ざし時。子太郎跡を打ち見やり、灯を
上げ表の戸、夜の構へのそこここと、こなたの道よ
り歩みよる振りの袖の香やごとなき、面を隠す衣か
づき誰れ白絹のやさ姿。窺ふうちに隣りの軒。知ら
せの咳、^{しわがせ}主の求馬。

「今宵はどうして早かりし。サア／＼こちへ」

とその跡は云はず語らず手を取って、戸口立寄せ入
る跡に、子太郎は不審顔。隣りの門口耳をあて、聞き
すまして立戻り、

「なんでも隣の烏帽子めは俺とは違うてよつぽどえ
らい色事師ぢやわい。あいつが見事な烏帽子でアノ
代物占めをると聞えた。こちのお娘に聞かせたら。

たいていのことぢやあるまい。エゝはし早い奴では
ある」

とつぶやくところへ、娘のお三輪、寺子屋戻り、足早
に門口這入れば、

「やお三輪様戻らんしたか。サア／＼ことぢや／＼
／＼大事ぢや／＼わいの」

「オゝあの人わいのなんぢやいの。私にびつくりさ
しやったわいの」

「なんぢやさしやったわいの、さしやったわいのど
ころかいの。これお前に忠義を云うて聞かす」

「ムゝ忠義とはなんのことぢやいの」

「エゝ忠義とは忠臣のことぢやわいの」

「サその忠臣は知ってゐるがの。それがどうぞした
かや」

「サその忠臣はの、アノ隣りの烏帽子めがな」

「隣の烏帽子とは、求馬様のことかいの」

「才、求馬／＼、その求馬の姿から起ったこと。こちらの内儀様は家主へ用があつていかしやつた。その跡へなんぢやか知らぬが、真白な絹を被き、幽霊かと思つたら、美しい街妻が隣の門口こと／＼と叩いた。そしたら求馬様がつつと出て、『よう早う来たナア』と、手に手を取つてうちへはいった。ナントお三輪様。コリヤだまつて居られまいがな」

「そんならなんと云やる。求馬様の所へ美しい女中様が見えて、その女中様を連立つて這入らしやんしたと云やるのか」

「アイ」

「そりやマア合点のいかぬこと。幸ひ母様も留守なれば、そなた往て求馬様をここへ連れて戻つてたも」

「オット合点、呑み込んだ」

と走り出でて隣の門、破れるばかりに打ち叩き、

「コレ求馬様、隣の酒屋から使ひに來た。今のが済んだら、印判持つてござんせ」

と口から出次第、求馬はびつくり、『なにやらん』と立出づれば、ものを云はず、

「マア／＼こちへ」

と無理やりに手を引連れてわが家のうち。それと見るより娘のお三輪、口に云はねど赤らむ顔。

「求馬様お帰りなされたか」

「これは／＼お三輪様。寺屋へお出でなさつたげな」と互ひに味な墨付きを、子太郎がひつ取つて、

「サア／＼おれが役はもうこれまで、そこへなにかの立引きさんせ。ここらでわれら粹をとほし夜食の扶持にありつかふ。兩人ともエヘン、ソモのちに逢はう」

と納戸へ走り入りにける。

跡に二人は接穂なく、おぼこ育ちの娘氣に思ひ詰

めたる一筋を、云はうとすれば胸迫り、

「いま子太郎に聞いたれば、美しい女中様が宵からお前へ来てぢやげな。定めてそれは隠し妻。これまでお前とわたしが仲、逢うことさへもたま／＼に、千年も万年も変らぬ契りと仰しやった、その約束は偽りか。浮世の訳も弁へぬ在所育ちのわたしでも云ひ交したこと忘れはせぬ。あんまりむごい」と取り付いて、涙先立つ恨み言。

「これは思ひも寄らぬ疑ひ。なる程女中は来ているが、あれはソレ春日の神子殿。その連合ひ禰宜殿の烏帽子をあつらへに見えたのぢや。美女はおろか、いかな天女が影向あつてもほかへ散る心はない。和

歌三神を誓ひにかけ偽りはもうさぬ」

と時の間に合ひ落付かせば、さすがおぼこの解けやすく、

「神様まで誓言に、それでわたしも落付いた。必ず変つて下さんすな」

と立上つて、七夕に供へ祭りし二つのおだまき。持出でて前に置き、

「わたしが寺屋にいた時にお師匠様に聞いて置いた。殿御の心の変らぬやうに星様を祈るには白い糸、赤い糸、おだまきに針を付け結び合はせて祭るとやら」
「オ、それがすなはち願ひの糸の乞巧針」

「ムお前もよう知つてぢやナア。白い糸は殿御と定め、女子の方は赤い糸。それで私もこの願籠め寺屋で見た本の中に、心をかけし女の歌。ア、なんとやら、オ、それよ『恋ひ渡る、思ひはちぢに結ばれて、

幾夜願ひの糸の緒環』

「ホ、その男の返しには『相見ての、のちも願ひの糸筋を、よそへ乱すな君が小田巻』」

「アイ、さうでござんした。いつまでも変らぬし、赤い糸をお前に渡し、白い糸を私が持ち、契りも長き願ひの糸。夫婦の約束星合ひにかささぎならぬ小田巻を千代のなかだち取りかはし、肌に付け合ふわりなき糸にし」

求馬がうちより以前の女、歩み出でてこなたの門口。
「隣りの烏帽子折様はこなたへ来てござるかな。許さつしやれ」

とうちへ入る。姿に求馬は手持ち不沙汰。お三輪はなんの気も付かず、

「ア、あなたがいまのお人かえ」

「オイノあれ、神子様ぢや。それで薄衣着て

ござる。ナアもうし、お前様はアノお連合ひ様の烏帽子をあつらへにお出でなされましたのぢやナ。さうでござりませうがな。サ、さうでござります」と紛らかす。包む詞の絹を漏る、月の笑顔をぴんとすね、

「コレもうし求馬様。あの女中はお端女か、なに人でござります」

「アノこれはこの酒屋の娘御」

「ム、そのマア隣りの娘御と最前から久しい間、なんの用がござりました」

と問はれて求馬は答へもなく、うちつく素振り、見て取るお三輪。

「コレもうし、神子様とやらいふ女中様。人をマアお端女かなのとひっこなしたものの云ひやう。求馬様にはアイ、私が用がたあんとござんす。お前の

お世話になるまいし、構うて下さんすな」

「オ、これははしたない。そのやうに云はしゃつても、そもじなどの用を聞く求馬様ぢやないわいなう。

サアお帰り」

と手を取れば、お三輪が隔てて、

「イエ／＼、わたしがまだ用がある。いなすことはなりません」

「イイヤここには置きはせぬ。邪魔せずとそこ通しや」

と、手を引つ立てて立出づれば、

「イヤ離さじ」

とお三輪もまた、あなたへ引けば、こなたへ引く、訳も渚にたはれる雁、つばさ振り袖ふり分け姿。恋を争ふ、その折から、いきせき戻るこの家の母。

「ヤア求馬殿。こなさんには用がある。どっこへも遣ることならぬ。動くまいぞ」

と身構へに、何かは知らず白絹の姫は外へと出で行くを、とめる求馬に、またすがる娘を押分け母親は、

「求馬やらじ」

と引止め、繋ぐ手と手をしがらみの風に揉まるる争ひに、子太郎立出で見廻して『これ幸ひ』と母親の帯にしつかりくくつたる縄先、桶の呑み口にゆひ付け納戸へ逃げて入る。こなたは互ひに恋ひ慕ひ姿乱るる姫百合の、手を振りきれば、一時に乱れて走るを、母親が、『遣らじ』と追へば繋ぎ縄、力む拍手に呑み口抜け、酒は滝津瀬びつくり敗亡、三人門へ遅れじと同じ思ひを跡やさき、道を慕うて

道行恋苧環

岩戸隠れし神様は、誰と寝ねして常闇の、夜々毎

に通ひてはまた帰るさの、道もせ気もせそれも何故

恋故にやつるゝ所体恥かしと、おもかげ隠す薄衣に、

包めど香り橘姫、思はぬ人を思ひ侘び、心のたけを

口説けども、つれなき松の下紅葉、焦がれて絶へん

玉の緒も、殿故ならば捨て草も暫しは憩ふ芝村の、

釜が口をも出離れて、歩むに暗き、くれ竹の、茂れる

中を分け行けば、松の木の間にちら／＼と、見

へつ隠れつ、帰るさの、跡を求馬が慕ひ来て、互には

たと行き合ひの、星の光に顔と顔。『ヤア恋人か何故

に、こゝまで跡を追ひ鳥は、もしやねぐらの契りを

も叶へてやるとのお心か』と、胸にはいへど詞には、

おもはゆぶりの袖几帳。

「成程切なる志、仇に思はじさりながら、さほど焦

がるゝ恋路にて、昼をば何と鳥羽玉の、夜ばかりな

る通ひ路は、いと不審なり名所を、聞いたる上はこ

なたより、二世の固めは願ふ事、あかさせ給へ」

とひたすらに問はれて実にも恥かしの、もりて余れ

る浮き身の上、

「語るにつらき葛城の、峰の白雲あるぞとも、定か

ならざる賤の女と、思ふて深い疑ひの、雲を晴らし

て自らが、思ひも晴らして給はらば、どんな仰せも

背くまい。たとへ草葉の露霜と、消えても何の厭や

せぬ。これ程思ふに胸慾な、解けぬお前のお心は、あ

んまり結ぶの神様を、祈り過ごした咎めかや。つれ

なの君や」

と恨みわび。思ひ乱るゝ薄蔭、それとお三輪は走り

寄り、なかを隔てゝ立柳、立ち退く袂引き止め、

「エ、聞えませぬ求馬様。ソリヤ氣の多い、悪性な。

そもや二人が馴れ初めは、始めて三輪の過ぎし夜に、葉越しの月のおもかげは、お公家様やら侍様やら知れぬなりふりすつきりと、水際の立つ好い男。外の女子は禁制と、しめて固めし肌と肌。主ある人をば大胆な、断りなしに惚れるとは、どんな本にもありやせまい。女庭訓躰け方、よふ見やしやんせ、エ、嗜みなされ女中様」

「イヤそもじとてたらちねの、許せし仲でもないからは、恋は仕勝よ我が殿御」

「イ、ヤわたしが」

「イヤわたしが」

と、ともにすがりつ、手を取りて

へ園に色よく咲く草時は、男女になぞらへ言はゞ、

言はれふものか夕顔の、梅は武士、桜は公家よ、山吹

は傾城、かきつばたは女房よ。色は似たりやあやめは妾、牡丹は奥方よ、桐は御守殿、姫百合は娘盛りと撫子の、さあなるぞえ。なるとならずと奈良坂や。

この手柏の二人の女、睨めば睨む萩と萩、中にもまるゝ男郎花、放ちはやらじと縋り付き、こなたが引けばあなたが止め、恋のしがらみ蔦かづら、付き纏はれてくるくく、廻るや三つの小車の、花より白む横雲の、たなびき渡りありくと、三笠の山も程近く、鳴る鐘の音に驚く姫『帰る所は何処ぞ』と、求馬が氣転振り袖の、はしに縫ふてふ取り交はす。縁の苧環いとしさの、あまりて三輪も悋氣の針、男の裾に付くるとも、知らず印の糸筋を、慕ひ慕ふて

金殿の段

れてぞ忍ばるる。

迷ひはぐれしかた鶉うずら、草の靡なびくをしるべにて、いき

せきお三輪は走り入り、

「エ、この芋環おたまきの糸めが切れくさったばかりで、道

からとんと見失うた。さりながらここより外に家は

なし。大方この内へはいつたに違ひはない。エ、誰

れぞ来よかし。問ひたや」

と見遣る先より、おはしたが被かつぎまぶかに、しやな／

＼と豆腐箱提げ歩み来る。

「もうし／＼」

と呼びかくれば、オット呑み込み早合点。

「才、お清所尋ぬるのなら、そこをこちらへかう廻

つて、そっちやの方をあちらへ取り、あちらの方を

そちらへ取り、右の方へ入って、左の方を真直ぐに
脇目もふらずめつたやたらにずっと行きや」

「イエ／＼私が尋ねるのは、お清どのとやらではご
さんせぬ。年のころは二十三四で色白にくつきりと
した好い男は参りやせなんだかえ」

「才、／＼来たげな。来たげな。それはアノお
姫様の恋男ぢやげなの。三輪の里から路追うて来た
ところを、なにがお局たちが引つ捕へ、有無を言は
せず御寝所へぐつと押し込み、上から蒲団をかぶせ
かけ／＼、ア、／＼宵の中内証の御祝言がある筈と、
暮れぬ内から騒いでぢや。エ、けなり、こちとまで
内太股がぶき／＼と、卯月あたりの弾け豆。豆腐の
御用が急ぐに」
と喋り廻つて、出でて行く。

「サア／＼／＼ひょんなことが出来てきた。ほんに

／＼油断もすきもなるこつちやない。大それた人の男を盗みくさつて、何ぢやいしこらしい内祝言ぢや。余りな踏み付けやう。よい／＼。ドレその代りどこに居ようと尋ね出し、求馬様と手を引いてこれ見よがしにいで退けるが腹いせぢや」

と行かんとせしが、

「イヤ／＼はしたない者ぢやとひよつと愛想をつかされたら、と言うてこのままに見捨てゝこれがどう往なれう。エ、どうせうぞ」

と心も空。登るきざはし長廊下、行き交ふ女中が見咎めて、一人が留むれば二人立ち、三人四人いつの間に、友呼ぶ千鳥むら／＼と、こゝかしこから寄りたかり、

「ついし見馴れぬ女子ぢやが、そなたは誰ぢや。何者ぢや」

「ハイ／＼、イヤ私は内方の、オ、それよ、さっきのお清殿は寺友だち、奉公に出られてから久しう逢はぬなつかしさ。ちよつと見舞に寄りましたら、これはマア／＼よう来た。上がれ、茶々吞め、さうしてアノ煙草のめ、アノお上にはあた滅相な御祝言がある
と聞けば聞くほど涙がこぼれて、あたおめでたい事ぢやげな、ほんに内方の様なよい衆の御祝言はどの様なものぢやおのれやれ押んでなり、腹癒よと、うか／＼こゝまで参りました。どうぞお前方のお心で、その賀様をちよつと拝ましてもらうたら忝うござります」

と言ふ顔も恨み色なる紫の、ゆかりの女とはや悟り、『なぶつてやろ』と目引き、袖引き、

「マア／＼そちは仕合せな。かういう折に参り合はせ、お座敷拝むという事は、女おなの身では手柄者した

がこちらが呑み込んでお座敷へ出すものゝなんぞさゝずばなるまいに、何と皆さん、いつそのことこの者に酌取らそではあるまいか」

「よからうく」

「ア、もうし、その酌とやらは」

「オ、何のまたそちたちが知つてよいものか。いまこゝで教へてやろ。幸ひこゝに御酒宴の銚子島台。

あり合ひの智君さまには紅葉の局。梅の局は嫁君役。

残りはかいぞへ待ち女郎」

と桜の局が指図して、いやがるお三輪に、長柄の銚

子持たせ、持ち添へ。

「マア盃は三つ重ね。嫁君へ二度ついで、左へ二足。

コレ立つのぢや。エ、何ぢやいの。うか／＼せずと

よう覚や。三度目ついで智君へ。コレ酒がこぼれる

わいのう。不調法な。サこれからが乱酒謡ひ物。これ

も嗜みなければならぬ。サア四海波しかいなみなと謡やいの」

「エ、」

「エ、とはいやか。そんなら智さま拝ます事はマアならぬ。サそれがいやなら早う謡や」

とせつき立てられ。

「これがマア何と千秋万歳の」

千箱ちはこの玉の血の涙声詰らせてないじやくり。

「オ、めでたう哀れに出来ました。色直しにはんな

りと、梅が枝でも露組でもサア／＼聞きたい。所望

ぢや、／＼」

「エ、あられもない事おつしやりませ。山家育ちの

藪鶯、ほう法華経も片言ばかり。上り下りの仇口や、

馬士まじの唄なら聞いても居よう。もう何事もお赦しな

され。サ早うその智さまに」

「サア智さまが見たくば早う謡や。馬子の唄なら面

白からう。ついでに振りも立ってしや。いやならこ

つちもなりませぬ。帰りや／＼」

と引き出され、

「サア／＼／＼何のいやと申しませう」

「サそんなら謡や」

「アイ／＼／＼謡ひまする」

と泣く／＼も、涙にしぼる振り袖は、鞭よ、手綱よ、

立ち上り、

「竹にサ、雀はナア、品よくとまるナ、とめてサとま

らぬナ、色の道かいなア、ヨ、エ、ここなほつ腹

め、とこの様に申しまする」

と打ち伏せば、皆みな一度に手を打って

「さてもきつい嗜み事。よい慰みで我れわれが、ほ

てつ腹までよれました。馬子どの大儀」

と言ひ捨てゝ行くを、驚き、

「コレもうし、私もともに」

と取り縫^{すが}れど、ふり離されてがばとこけ、寝ながら

裾にしがみ付き、引きずられて、声を上げ、

「なう皆さん、お情ない。どうぞ私も御一緒に連れ

てござつて下さりませお慈悲、／＼」

と手を合はせ、拝み廻るを叩きのけ、

「オ、しつこ、とても及ばぬ恋争ひ。お姫様と張り

合ふとは、かなはぬ事ぢや、置いてたも、大胆女のし

つけをせう」

と耳を引くやら、脇明けより手を指し入れてこそぐ

るやら。つめりつ、叩いつ、突倒し、

「サア／＼これで姫様の愠気の名代納った。いよい

よめでたい御祝言、三国一ぢや。賀取り済ました。し

やん／＼、しゃんと済んだ」

と打ち笑ひ、局々へ入る後は、

「エ、胴慾ぢや／＼胴慾ぢやわいのう。男は取られその上にまたこの様に恥かゝされ、何ところへて居られうぞ。思へば／＼つれない男。憎いはこの家の女めに見かへられたが口惜しい」

と袖も袂も喰い裂き／＼、乱れ心の乱れ髪。口に喰ひしめ身を震はせ

「エ、妬ましや、腹立ちや、おのれおめ／＼寝ささうか」

と姿心もあららしく駆け行く向ふに、以前の使者「オ、そなたも邪魔しに出たのぢやな、もうかうなつたら誰が出ても構はぬ／＼。そこ退きや」

と袖すり抜けてかき入る裾、しっかと踏まへ、

「コリヤ待て女」

「イヤ待たぬ、ここ放しや／＼」

と身をもがく。たぶさつかんで氷の刃、脇腹ぐつと

差し通せば、『うん』とのつげに倒れ伏す。刀つき捨て辺りを窺ひ、目を配る。奥は豊かに音楽の、調子も秋の哀れなり。お三輪はむつくりと起き返り

「さては姫が言ひ付けぢやな。エ、むごたらしい、恨みはこちらにあるものを却つてそちらから殺さする。心は鬼か蛇かいやい。オ、殺さば殺せ。一念の生きかはり死にかはり、付きまとうてこの恨晴らさいで置かうか。思ひ知れや」

と奥の方、睨め詰めたる眼尻も、叫ぶ声音こわねもうはがれて、さもいまはしきそのありさま。じろりと見やり、

「女悦べ。それでこそ天晴こうけれ高家の北の方。命捨てたる故により、なんぢが思ふ御方の手柄となり入鹿を亡なすす術の一つ。ホ、ウ出かしたなア」

「なんと賤しいこの身を北の方とは」

「ムホ、ウそちが語らひ申せし方は忝くも中臣の長男淡海公」

「エ、シテまた私が死ぬるのがいいというお方の手柄になつて、入鹿を亡ぼす術とはえ」

「ホ、その訳語らん。よつく聞け。彼れが父たる蘇我の蝦夷子。齡傾くころまでも一子なきを憂へ、

時の博士に占はせ、白き牝鹿の生き血を取り、母に与へしその驗。健かなる男子出生。鹿の生血胎内に

入るを以て入鹿と名付く。さるによつてきやつが心をとろかすには、爪黒の鹿の血汐と疑着の相ある女

の生血、これを混じてこの笛に濯ぎかけて調ぶる時は、実に秋鹿の妻恋う如く、自然と鹿の性質顯はれ、

色音を感じて正体なし。その虚を計つて宝劔あやまちなく奪ひ返さん鎌足公の御計略。物蔭より窺ひ見るに、疑着の相ある汝なれば、不便ながら手にかけ

し」

と件の笛の六穴に、たばしる血汐受け濯ぎ受け濯ぎ、

「いまこそ揃ふこの幻術。この笛こそは入鹿をひしぐ火串ならん。ハ、ありがたや」

と押戴き、いさみ立つたるその骨柄、げに藤原の御内にて金輪五郎今国と鍛へに鍛へし忠臣なり。

「のう冥加なや。勿体なや。いかなる縁で賤の女がさうしたお方と暫しでも、枕かはした身の果報、あ

なたのお為になる事なら、死んでも嬉しい、忝い。とはいふものゝいま一度、どうぞお顔が拝みたい。たとへこの世は縁薄くと、未来は添ふて給はれ」

と這ひ廻る手に苧環の

「この主様には逢はれぬか、どうぞ尋ねて求馬様もう目が見えぬ、なつかしい、恋し〜」

といひ死に、思ひの魂の糸切れし。小田卷塚と今

の世まで、鳴り響きたる横笛堂の因縁かくと哀れなり。今国不憫^{ふびん}いや増しに、

「せめて葬り得ません」

と背なにお三輪が亡骸を、おい／＼駈^かけ来る荒しこども、

「曲者やらぬ」

と追つとりまき、

「ヤアしおらしき蚊蜻蛉^{かんとんぼ}めらいち／＼勝負は面倒なり一度にかかれ」と力士立ち

「ヤア憎き広言打ち取れ」

と前後左右に十文字。槍先揃えて突き出すを取つては投げ据へ叩き伏せ、砂石の如く放^ほり飛ばされ、逃げ行く奴ばら余さじと、奥深くこそ追うて行く

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。